









雨の日から一緒

を避け、小さな物をいくつもの取りあはせて作り出す
 鳥といひ、蝶といひ、あるべくは手近のものも採りし
 またわざと其蝶や鳥をいく度も用ひ、つまりは種々多
 くりかへししました。

取りまじへた韻文は俗調さはまるきりなく、
 らが、實際幼童に與へる唱歌の類の語句の高麗さ

註



雨の日ぐらゝ緒言

子供によませるためとて故さらには一部貫いた脚色の物を避け、小さな物をいくつも取りあはせて作りました。鳥といひ、蝶といひ、あるべくは手近のものを種にし、またわざと其蝶や鳥をいく度たびも用ゐ、つまりは同ト事をくりかへしました。

取りまドへた韻文は俗調きはまる物をわざと多くしました。が、實際幼童に與へる唱歌の類の語句の高尙なのは

緒言

更に感化の功を奏せぬとの事實が現に今日いくらも有る故で、それから大方の嗤笑を顧みず、却つて此道を取つた次第でも有りました。

明治廿四年

五月中旬

美妙齋主人

雨の日ぐらし

山田美妙

糸犬一郎

(一)

糸犬一郎といつて十歳よある一人の男の兒が有りました。勇ましく、威勢のいゝことが好きで、學校で教はつた書物の中にある昔のえらい人の話とや、強い武者の事はよくよく心よとめて決して忘れませんでした。ある春の日の夕方、一郎は自分の家の庭にある芝の上に窺ころびながら一冊の書物をひろげて讀んで居ました。

その書物を何かと言ふに、これは一郎を可愛がる一郎の伯父が一郎の勉強を褒めて褒美にくれた面白い書物でした。その書物の中には世界のいろいろな國々に様々めづらしい獸や、鳥や、景色や、何れ澤山書いてあつて、一度読み出ると途中で廢すことの出来ぬほど面白い書物で、一郎も取つては何よりも嬉しいものでした。そこで一度はその書物を一郎も読みとほし、猶それで物足りぬとてふたゝびまた読み直してドめました。とさりと面白がつて読んで居るうち、不圖何か思ひ附いた事があるたと見えて、たちまち書物を其處へ置き、自分のま

ぐ側に居る姉の方を見ました。

「姉さん！」

呼び掛けられて姉も一郎の方を向き、「何だえ？」

「いゝねエ、方々旅をするのは」。

だしぬけて言はれたため姉は不思議に思ひました。――

「旅をまゐるのがいゝとは？」

「何さ、旅をしたいねエ。御前、色々な珍らしい鳥

や獸が方々の國には有るんだもの、それが見られるから好いちや無いか？」

「いやだ、あたし旅なんぞ」。

「御前？」

御前なんぞ構ふもんか。

女なんぞどう

して旅が！

御湯殿の暗アいところに猫の目が光ッて

居たッて御前いつかびツくりしたぢや無いり、ね、さう

だらう。だらう女あんぞいけやしない。私、ね、

さうぢや無いの。短銃を持ッて、ね、刀とさして、ね、

それりら、ね、鎗を持ッて、ね、さうして虎を退治に行

くの——方々旅をして」。

姉は思はぢ笑ひ出—ました。——「ほ、ほ、ほ、口はツク

りえらい事をいふよ。いつら御前御隣りの馬が嘶いた

時びツくりして自分も一所に泣いたぢや無いり？」

「あの時ヤ仕方が無いもの」。

「それ、仕方が無いと言へは夫ツさりだね。そ

して虎や、獅子はどんなに恐いものだらう。御馬は人

を食へは爲ないが、虎や獅子は人を食べるよ。」

「だッて構ふもんか。」

「なぜ？」

「だッて私の短銃や鎗を持ッてらア。それからまた刀

も。」

「御前そんな色々な物をいくつも持ッてどうする氣

だえ？」

「そりやア女は知らないさ。虎が出て来たら短銃で
づどオん！ さう走ると虎が撃たれて斃れるさ。其
處へ行ツて、鎗でづぶく突ツ徹してやるの。」

「それから？」 姉の笑ひながら。

「それから刀ア抜いて首を斬ツてやる。」

「ほくくく、左様うまく行きやいゝが、虎だツて強い
よ。だまつて撃たれて居るものかね。」

「おに、構ふもんか。」

「構ふもんかど此方はかり言ツたツて仕方が有りや爲
ない。第一、そして御前は鎗や刀がつかへるものか、

ね、そんな小さな身長をして、それにまた力も無くツてさ。
姉は道理の事と言ひましたたが、一郎は中々承知しませ
んでした。

「女おんぞよは分らないよ。第一、虎や、獅子や、

山や何り見た事も有るまい。」

「御前だツて。」

「見た、私このとほり書物で。強いぜ、宮本武藏

や、岩見重太郎おんぞ。私これから旅に出るんだ。

旅へ出て獣や何り退治して——こんな家に居るもんか。」

「しッ！」 と姉が差し止めました、「こんな家に居る

もんかあんで、勿体無い事を御言ひで無いよ。阿父さんや阿母さんの御世話になり、毎日氣樂にして居られるのを嬉しいおと、思はせ、こんな家なんて、そんな事言ふものぢや無いの。

一郎はだまつて居ました。姉の猶も言葉をつぶけ、

「大人しくしてよく勉強し、家かんと出せ、阿父さん

や阿母さんよ御心配を掛けないのが本當の勇者と言ふもんだよ。」

一郎は猶だまつて其儘しばらく聞いて居ました。が、

稍有つてまた姉の言葉を打ち破る言ひ草を考へ出しま

た。

「けれども私がえらい人よ爲つて、世界へ名を揚げる

やうにさへ爲れば阿父さんだつて阿母さんだつて喜ばアね。」

「そらまだそんな事と言つて居る。御前が虎や獅子

に逢つてどうなるものか。もうくそんな事を言ふも

んぢや無いよ。虎や獅子に睨まれて、恐がつて直と泣

き出さうと思つてさ。ほくく。」

「泣き出せ！ 誰が——男！」

「口はツかりだよ、そりや本當に。妾や旅かんとぞに

出て、そんな怖い思ひ爲るのは大嫌ひ。」

「ところが私の大好きだ。嬉しいを、今に旅へ出て

行くんだ。」

どうしても服さぬ一郎の強情に、姉のまた向きを變へて諭し出しました。

「御前、それだつて、旅をさるに御金が入るよ。」

「さうだともさ」と一口にやり付けました。

「御前この御金を持つてゝるかえ？」

「持つてゝあくつて！」

「いくら？」

「十錢。」

姉のほとく呆れました。——「人、馬鹿に御しでかい

よ。」

「だつて嘘ぢや無い、十錢本當に有るんだもの。」

「ほくく、それで旅が出来る氣かえ？」

「あら、姉さん、何で笑ふんだらう。」

忌々しさうに小間とやくれた舌うちをして、「何にも

知りもしない癖に。何てツタツて私旅へ出るからい、

や。かまふもんか。」

「およしよつてへは、本當に。御母さんに言ツつけ

るよ。」

兎角に姉は窘め、また諭しました。

一郎は返答せぬ、元より一時の子供心、根も葉も有る事
での無りらうと姉は其儘にして氣にも留めぬ、やがて日
も大分暮れて来たので、さア家へ行くうちや無いと言
ひながら先へ立ッて部屋へ立ち戻りました。

(二)

子供の時は世の中の事が何でも唯自分の自由を爲ると
思ふもので、世間の荒浪に揉まれぬ間、其處邊の角の取
れぬのも無理では無い、一郎も即ちこれでした。 嘶
や書物で聞いたり見たりする珍らしい鳥獸や、勇者の事
がつくと胸へ浸みわたり、活潑な性質として如何にも其
真似が爲て見たく、中々姉に言はれたぐらゐで其事を思
ひ切りませんでした。子供の癖にと姉に言はれた事、
それが一郎に口惜しく思はれました。人を馬鹿にし
て居るなら今に見ろといと勢ひが猛くなり、其晩は其

事にはかり屈托しました。

どうしても思ひ切れぬ儘、終に無茶苦茶に心を決め、

父親の居間からいつの間にか一挺の短銃と一振の刀とを

取り出し置きました。一度學校の試験がよく出来た時一郎

の親にねだつて軍人の服に似た金筋入りの洋服をこしら

へて貰つた事が有り、その服を思ひ出してどうしてか夫

を着用し、鎗だけの無いもの、仕方が無いとあきらめ

て、例の十錢と云ふ剛氣な路用を懐中し、その宵の内よ

よくも思ひ切つたもので、とうとう家を忍んで出ました。

一郎の家と云ふ王子北西ヶ原の近處で、塀一つ外へ

出れば、四方の寂しい田や畑、又の森などが有るのみで

した。不斷の夜更けて手水場へ行くよも燈光など點け

なければ行けあかつた程の臆病な兒が口惜しいと思つた

餘り不思議よも此晩の一人を戶外の淋しい處へ出掛けま

した。そして何處を志して行く氣かと云ふに、目ざま

處の豫ねてから嘶しに聞く東京でした。親は連れられ

ての東京の淺草觀音や上野公園へも一二度行つた事も有

り、大變な勇者が第一に目ざした處の觀音や上野などの

大層賑かな處でした。丁度この晩の月夜でも無し、そ

れながら短銃も持ち、刀もさして居ると思ふと、何と無

く気が強く、星光りに透かして田の畦をすた〜歩いて
まづ怖がる様子も有りませんでした。一郎が居なく爲
ッて、後で両親のトめ姉などが何んなに心配する事であ
らう杯とい些しも一郎を気が付かぬ、只好い氣に爲ッて
東京の方へと向ひました。

彼は二時間ばかりの歩いたと思ふ頃、そろ〜と足首
に草臥が出て來ました。家を出た初めの如何にも凄ま
トかつた威勢、それが段々と減ッて來ました。威勢が
減り、足が草臥れ、そして身體が疲れて來るに隨ッて、
さア旅が面白くなく爲りました。夜はますます更ける





し ら ぐ 日 の 雨

く気が強く、星光りに透かして田の畦をすらすらと歩いて
まづ飽がる様子も有りませんでした。一帯が静かしく為
つて、後で両親のトメ姉などが何んなに心配をなさるも
らう探といひ些しも一郎の気が付かぬ、只好い氣に為つて
東京の方へと向ひました。

彼は二時間ばかりの歩いたと思ふ頃、そろそろと足首
に草臥が出て來ました。家を出た初めの如何にも凄ま
じかつた威勢、それが段々と減つて來ました。威勢が
減り、足が草臥れ、そして身體が疲れて來るに隨つて、
さア喉が面白くなく歸りました。夜はますます更け

はかり、星影がいとゞ晃々として凄く、春といひなが
 ら夜寒の風さへ身に浸みて来て、たゞ何と無く襟元がぞ
 くづくするやうに爲りまゐた。我慢に我慢が爲りかね
 て、道傍の石に腰を掛け、つくづくと考へ出すといよい
 よ淋しく爲りまゐた。其邊にむらがり生へた灌木どさ
 わとと揺る風の音が何かの獣の夫かとも聞き做されて
 こいさ、凄さ、淋しさが一途に胸を衝いて來まゐた。
 四方の沈々として田舎道の事として人聲も何も聞えぬ、さ
 て歸るにも歸られぬ、縮んで仕舞ふやうに爲りまゐた。
 たゞと夫でも其儘路傍にくづくとして居られたものでも



無し、どうしやうかと突つと身を起して立ち上がり、二足
三足歩いて見ると、これの如何、今迄の夫程とも思ひな
かつた草臥がいつの間にか充分出て来て、足を動かさな
び脳天まで其疼さが浸みました。さア歩くにも歩かれ
ぬ、まよゝゝ悲しく爲つて殆んど涙ぐんでも来る。どう
したもののりと苦勞して、闇の夜ながら遠近を透りして見
る目先にあたり、のるり向ふに一棟の小さな家が有りま
した。ちらゝとして燈光も見える様子、一郎も俄り
にまた頼もしく爲り、其方へ行つて泊めてゞも貰はうと
やうゝの事で思案を定め、草臥足を引きぬりゝゝ、一
生懸命その方へ向ひました。

やうゝの事で草臥足を引き摺りあがら其家まで辿り
着いて見ると、是は一軒の百姓家で何りまだ夜延の仕事
をして居た處でした。全体が一郎も大した厚かましく
も無かつた子供で、おゝの家へ今辿り着き、着いては、
どうぞ泊めてくれろと頼むのが何だかどうも極りがわる
くて、それ故幾度かその家のまはりを空しく只ぐるゝ
廻りました。が、それで草臥が休まる物でも無し、そ
の強面さも思ひ切り、言ひにくい處を一生懸命に爲つて
闇雲にその家の門を叩き、どうぞ泊めて呉れろと頼みま

した。

中から出て来たのは五十ばかりの親父で、即ちこれが此家の主人でした。見れば年端も行かぬ子供がいくらか涙含んだ様子で泊めてくれると言ふ工合、親父も可愛相に爲り、承知してさア家へはいれと言はれた時、其時の一郎の心持ちは嬉しくてくく夢とも現とも更に分からぬ程でした。

それから腹が減つたらうと夕飯をも振舞はれ、風呂へさへ入れて貰ひ、活々とした氣持にゐるとさア眠く爲つて來ました。この家の者も九つや十の小さな子が何の子細で夜中まで外を歩いて居るか、そおが不審であらぬ、やがて聞かうと思ふ内に恐ろしく睡氣ざして一郎は兎角居ねふりまで始めた様子に、そんなら明日の朝聞いてもいゝと夫からして深切にも床を取つて寐かして呉れました。

さて翌る朝と爲り、やうくの事で起されて一郎は目を覺まし、一寸戶外へ出て景色を見ると、草臥も早一晚終つて抜けた揚句の事と言ひ、朝景色の工合が如何にもいゝ心持ちでほとく昨夜のくるしい事や怖い事は忘れざるやうに爲りました。御膳だと言はれて上へ上ると一

家が飛んだ親切者で何如にもよく勤ツてくれ、朝飯さへ食べさせて呉れました。そこで其親父といふのが一郎に向ひ、一体貴君は何處の人で何として夜中まで歩いて居た事かと聞き出しました。

此時一郎は咽元過ぎて熱さを忘れ、昨夜の事に懲りもせず、又も晝間と爲ツては自分が前に思ひ立ツたやうな事をしたく爲ツたところで、それ故今こゝで親父に聞かれて、實は大きに威張ツた氣味でこれゝの譯で旅に出たと眞面目に爲ツて言ひました。餘りの事、親父も吃驚する、しばらくは一郎の顔を穴の開くほど見て居ました。

「そして貴君は何處まで旅をするつもりですか？ 何東京へはトめに行ツて？ その通り一人では是から？」

當り前だと言はぬばかりの顔付さで一郎は些々笑ひ顔ををして居ると、親父は重ねて又、

「こゝろら東京まで何のくらゐ有ると思ひなさる？」

まだゝ今迄あなたが歩いて來た道程の十層倍は有りませよ。それに又昨夜だツて——貴君が宿を頼みに來た

時ハ泣顔ををして居ましたよ。それが可愛相だと思ツたからこそ泊めもりました。如何に子供でもそりやア餘

り思ひ切ツた話した。 嗚まア御兩親の心配して居るさ

るだらうが、私や決して悪い事言はないから是からそ

んを馬鹿ア言のむによく〜考へ直して早く家へ歸んな

さい。 それに虎狩りや、獅子狩りが爲たいツて——途

方も無い事を言ひなさるもんだ、東京へ行ツたツて何で

虎や獅子が居るものかね。」

「朝鮮に虎が居るよ。」

「朝鮮? あのままア朝鮮?」

位有ると思ひなさる。 外國でせよ。」

「だツて歩いて行きやア……」

「その足がつゞくうね。 馬鹿ア言のむと歸んなさい

よ。 どんかに御兩親の心配して居なさるり知れやとあ

い、斷り無になんぞ出たり何りして。 是るい事言

はないうら一時でも早く親の心配を減らさやうに爲あ

ちやア……え、坊ちゃん本當でせよ。」

親切に言ツて聞かせてくれた良薬の扱口に苦く、何處

まで強情な生れ付きり一郎のまだ〜承知しませんでし

た。 が、飛んだ深切な百姓親父、強ひて此方が承知を

しなければ事に因ると自身一郎につき添ツて家へ送り

へせり、巡査に引きわたせり、いづれ爲りねぬ様子と一

郎も考へ附き、それらして肝太くも表部だけ承知した
体を見せました。ところで言ひ甲斐が有ったと百姓も
大に喜ぶ。腰辨當をさへこしらへてくれ、之を食べながら
一刻も早く兩親の處へ歸れとばかり誠に残る限無く教
へ諭してくれました。

それら禮を述べて一郎も百姓家を出ましたが、さて
前にも言つた通りほんの表部だけ承知した体に見せた丈
の事ゆゑ出るや否やわが家の方への向ひぬ、道をかへて
矢張り東京の方へと向ひました。子供の事ゆゑまだ道
をは知らぬもの、朝の事ゆゑ太陽を目安とし、其方を

東と考へ、何でも南にあたる方へ行けば間違ひ無く東京
へ出られると工夫を付け、それからとぼくと辿り
まじさ。

が、自分の氣が附かぬもの、何時の間にか方角の違
つて仕舞つたので、却つて元の自分の家の方へ行く道へ
掛つた譯に爲りました。勿論人にも聞かぬ事ゆゑ自分
でそれと氣の附く筈も無く、それで好い氣に爲つて切り
と道を歩いて居る内に、そろく辛く抜けた斗りの草臥
が最早また出て來ました。また腹も減る。感心に當座
の我慢して居たもの、終にのこらへ切れぬ、例の懷ろに

して持つて来た僅ばかりの巾着錢を出して路傍の茶店の菓子を買ひ、それをむらやぐ遣りながら又些と歩きました。が、菓子が無くなり、別に心を慰めるものが無くなると思ふと、自然また草臥も前より烈しく催して来てどうにも角にも仕様の無く、暫時の間と其邊の辻堂の椽側に腰を掛け、つひうとくと眠りまゐりました。

眠って居たどうかのいづみで不圖目を覺まして見ると大變、自分の居る直側にぞつとする程の蛇が一疋蟠って寐て居ました。さア一郎が吃驚した事と言つたら、それいゝ大變でいた。夢中に爲つて飛び立ちました。

虎や獅子に逢つたら退治してやると云ふ位の強い兒がわづか蛇ぐらゐで仰天しました。一切まるで夢か現で、あつと言つて飛び立った切り後をも見ずに逃げ出しました。それで彼是十五六間、もう大抵大丈夫と立ちどまり、苦勞を爲らぬ故後ろを見ると仕合せと、蛇の追つても來ぬ様子、やうやくに胸を撫で下し、それからほつほつ歩き出るとは爲たものゝ、もはや怖くなつて堪らず、さア家へ歸りたくなりました。

まことに此處で懲りどして一郎も始めて本心に立ち歸つたので、蛇に威されたのがむらやぐ却つて一郎に好

い事でした。それから其邊に居る人に自分の家の方の見當方を尋ね、ものや左様して尋ねれば答へてよく教へてくれる人も有難く、大きに素直にもあつて教へた通りの路をとほく歩いて段々と歸つて来る内に彼是日の暮れ方とも爲りました。

世間の何と無く凄く、また淋しく爲る、歩いて居る目の前の朽木の洞穴などからだぬけに飛び出で蝙蝠や何かに幾度も駭かされながら漸くにして我家の門近くまで歸つて来れば、嬉し涙もこはれました、見覚えの有る森

流石に威張つて家へ入れば、ものや四方も暗く爲つたのに便りを得て、裏口の方うらそろくと回り、まづ

是で懐かしい家へ歸れたと一安心するにつけ、嘸や嘸兩親や姉に心配を掛けた事とも思へは、堪へ切れぬ涙にくれました。裏口からいつも母や姉の始終居る部屋の窓の下へにトリ寄れば、無残！中での母親が、今や現在絶え入るばかりに泣いて居ました。「一郎はどうしたらう」と口つゞけに言ひ續けて居る、それを外で聞く一郎の心の悲しさ、たまらぬわつと一聲立てる其聲は料らぬ中へも聞えました。おやと計りに窓の障子をあはて、

開けて見たのは姉、見ると下に居るのは一郎、「あら一郎が、阿母さん！」と大聲あけて呼ぶや否や直に連れに出で來ました。

やがて一郎も内の中へ入るその時の一家の喜びは口と言ひ盡くせる事でも無く、母は堪へず一郎を抱き締めやうとするその手を、しかし、父親は差し止めました。

差して止めて一郎に向ひ、姑らくトツと見詰めました。

見詰める其目に畏いところは無いもの、自ら備はる威光

で一郎は何と無く身も縮むばかり、どこへどうして居た

と尋ねられて子細を打ち明けるさへそもく恥かしく思

はれました。が、委細は父親も一郎の姉から聞いて知

つて居る事ゆゑ、徒らに性急に直深くは問ひ正さず、は

した無くは叱らぬ、「阿母さんの御心配はどれ程であつ

たか知れない。昨日も今日も人を出して尋ねさせた位

で、何をしたとて手に着かず、御前はそれ程阿母さんに

心配させ、癢までおこせ程苦勞させてそれでえらい勇者

に爲きたと思ふのか。よしやさうして旅へ出たからと

て理不盡に親杯に苦勞を掛けるのは大變な臆病者、決し

てえらい人とは言へない」と唯物やはらかに言はれるそ

の恥かしさ、眞實これが心に浸みて、その後は一郎も血

氣に任せた亂暴を悉全く思ひ止まり、泰然としてしツか
り構へて、遂に立派な人物にあられたとか。

無いものづくし

さても 無いく、無いものづくし

何が無いかと 尋ねて見たら、

學問した人 馬鹿が無い、

あまける馬鹿には 智慧が無い

智慧の無い人 金が無い、

花のいゝ木にや 實が生らない、

早く咲く花 よく持たない、

肥料がよければ 滓が無い、

氣象が高けりや けをばらない、

急がぬ 道には 怪我が無い、

氣落ちをするもの よく出来あ、

英雄もとから 良いでは無い、

一心こもれば 邪魔は無い、

やれ無い、それ無い、本當に無い。

扱も無い、無いものづくし、

何が無いかと 尋ねて 見たら、

豪傑やたらに 威張らない

賢人 なか〜高ぶらない、

譯なく怒るは 曲が無い、

恩を知らぬは 人で無い、

情を知らぬも 人で無い、

弱者いぢめり 見ツとも無い、

卒業免状 たゞ取れない、

學問さへすりや損は無い、

今の世の中 家が無い、

誰でも馬鹿から仕方が無い、

馬鹿の相手に 爲るもの無い、

やれ無い、それ無い、本當に無い。

忘れぬ慈愛

或る處の汽車の停車場近所に善兵衛といふ老人が有り
 ました。其邊をは毎日汽車が通行し、丁度此善兵衛が
 正直な男といふ處から踏み切りの處の番人を言ひ附けら
 れ、いつも汽車の通る時には其處へ来て立ち番をする事
 でした。之に亞いて善兵衛のする仕事といふのは矢張
 り是も其近處の墓地を守ること、お定め刻限に寺の鐘
 を撞くこと、で、誠に心細くも其日々々を過ぐして居ま
 した。もとより獨身の者、唯これだけからまだしも苦
 勞は無かつたでせう。が、三界の首枷といふ足手ま

どひが有りました。

首枷といふのは外でも無く、阿種といふ其時四歳になる女の兒で、此子も不運な事には早く兩親に別れて孤子と爲り、其邊の人が哀れに思ひ、養育金五十圓ばかりをほんの志から集めて阿種と一處に善兵衛へ托み、善兵衛の男の手一つで育てさせる事と爲りました。

が、阿種とて四歳の子供、どうして兩親に別れた事やらよくは分らぬ、唯何が無く兩親は姿が見えぬで悲しくなる計り、思ひ出しては泣きました。「阿母さんどう

したらうねエ。阿母さんどうしたらうねエ」と毎も文

句は極ツたもので、それを見る善兵衛の身にとつては哀れども何とも言ひ様が有りません。阿母さんは神々さんに爲ツたのだから最う二度と歸ツて来ないのだよと佛壇を指さして涙あがりに説得をいよく阿種は身をふるはせて、

「妾も神々さんにありたいわ。」

「神々さんよ爲ると死んぢまふの。ね、こはい。」

「うゝん、怖くツても好い！」

腸を急ぐられるやうな情無さ！ 抜け齒を噛み始め

て堪らぬ阿種をぶツと抱き縮めるよも肌薄な着物へ夜寒

の北風が破家の隙から吹き込んで燈光も涙の目をこぼした
 く境界。而も此夜は十二月の卅一日、いはゆる大晦
 日といふ晩で、寺々では百八の鐘を撞くのが一般の習は
 ちです。小さな阿種、抱いて寐てやツて一晩こゝろよ
 く暖めても遣りたのもの、扱務める處は務めなければ
 ならぬ、儀式として定まつた百八の鐘それを撞きに行か
 なければならぬ、それゆゑ其事を善兵衛は阿種にも言ひ
 聞かせる——淋しからうがよく寐て御くれ、阿爺さんの
 是から鐘の役目を爲し行くからと柔かくすかしても淋し
 がツて阿種は聞き入れる体も無い、それも不便と考へれ

は老人の目も先だつものは涙でこぼした。

時を時として其夜の烈しい雪嵐で、一歩でも外へ踏み出
 したら手足も氷り付くかと思はれる計りでした。 舊曆

まして十二三日頃の月は早く落ち掛かつて光りもたよわ
 く、西山の雲の邊よそれかと思ふ影が極めて微に見え
 くらぬを物で、瘦せ果てた木の宛がら凄まじい風も唸る
 かの工合ひその聲さへも哀れでした。 血氣も衰へて居

る老年の身、それも役目とあれば仕方無し、勉める丈は
 勉める覺悟、たゞ淋しがられ、は其淋しがる身より淋
 しがられる方が幾段つらいか！

「淋しいよ、阿爺ちゃん！ 行ッちや否」 と搔き口
説く阿種を悉々と抱きめ、

「だから些しの辛抱だ。 よ！ よ！ 直だ。 直よ
歸る。 行火で暖めても有るから些しの間寐ン寐して、

ね、いゝ兒だ、いゝ種坊だ。」

「うゝん、否だゝ、よウ阿爺さん。」

「いけないからさ。」

「うゝん、ちや妾も一所は行く。 一所は連れてツと

くれよウ。 もう泣かないからさア。 阿母さんて言は

ないからさア。」

「ちッ、そんな事を言ッて阿爺さん泣かせて呉れちや
困るぢや無いか、えッ、これまッ！ 御聞き！あの風

の音。 雪あらしで何んなよ寒い。 種坊かんどこゝ

えちまふ——凍えて死んぢまふ。」

「うゝん阿爺さんと一所は行きや死んでもいゝ。 あ

の死ぬと神々さんよ爲れるツて。」

どうしても聞き入れぬ、不便と思へば叱られぬせむ、

善兵衛も果は阿種よ負け、慈愛の温み切めて些しでも暖

かくと肌と肌びつたり付けて阿種を背よ載せ、古布子で

厚く上を包んで、時の切れぬ内と心も急ぐ、さむきがよ老

體箒が力、もはや一尺も降りつもつた雪を踏んでとほと
ほとして宿を出れた、かねてあら阿種の遊び相手と爲ッ
て居た斑といふ小犬も直に飛び起きて御伴になり、只う
れらがッて後りらつづく、其鈴の音も耳に入れば阿種は
最早今までの事の忘れたかの鹽梅、一心とほして祖父さ
んの背中へ暖まり、雪も嵐も何のかまはう、今泣いたの
は誰だッけかと曰ふ顔付き、「おや斑が来た」と笑ひ出
されて、聞く身の善兵衛の矢張り腸は千切れるやう。

手足も利かぬほどの寒さ、吐く呼吸も霜と爲るばかりの
困苦艱難、それを知らぬか佛でころの背中の子供、阿種

は唯嬉しくてくくならぬ、其内はいつかすやくくと眠ッ
て仕舞ひ、やがて響く鐘の音に駭かされて目を覺ませた
善兵衛は身を揺ぶりながら「よく大人しく寐ン寐ンして居
たね」と又一づくほろりと爲りました。

此物語りは現に作者の知り人、即ち前と言つたとほり
の名の人が實際逢つた事の有る漸いで、今は其人も最早
大人と爲ッて、それで此子供の時の此晩の事をかりは明
らかよ心で覺えて居るとの事でした。それでこの事を
思ひ出す度目上の人の慈愛をこみとくと考へ、怪我も
も、それ故、それ程可愛がッてくれた人よつらく當る杯

の事(こと)の出来(でき)を、眞實(しんじつ)の心(こころ)からやさしく取り扱(あつか)ひ、また敬(うやま)ふ心(こころ)も爲(な)して、終(つひ)もそれ程(ほど)ゆる善兵衛(ぜんべゑ)が死(し)ぬ迄(まで)一度(いちど)も阿種(あね)は逆(さか)らつた事(こと)も無(な)く、まことに快(こころよ)く暮(く)らゝ暮(く)らさせた(た)の事(こと)でせ。親(おや)もしる、祖父母(そふぼ)もしる、子(こ)や孫(まご)を思(おも)ふ慈悲(じ)はただ涙(なみだ)で見(み)せる丈(だけ)のもの、子(こ)や孫(まご)の夢(む)中でそれ(それ)を知(し)らぬ、世間(よ)は得(え)て全(ま)く氣(き)が付(つ)かぬ居(ゐ)る事(こと)、つくづくと考(かんが)へれば詢(まこと)も勿體無(むつたいな)いほごの事(こと)でせ。

雛(ひな)が三(さん)疋(びき)

朽木(くち)の洞穴(うら)の巢(そ)の中(なか)に

雛(ひな)が三(さん)疋(びき)ちよちよ。

はトめの雛(ひな)の言(い)ふこと(こと)にや、

「早く(はや)野廣(のひろ)い世(よ)に出(で)たい。」

かうして羽(はね)もはへそろひ、

ぐづくするものもつまらない。「

つぎなる雛(ひな)のいふこと(こと)にや、

「ほんま兄貴(あにき)の言(い)ふとほり、

眞暗(まくら)三寶(さんぼ)とこやみの

鳥と生まれた甲斐が無い。
こんな處に居たとても

羽翼はたく風を切り、

そこよ、こゝよと飛びたいよ、

罪も無くして牢をこもり

何の因果か、つまらない。」

次なる雛の言ふおとよや、

「ほんよみんなの言ふどほり、

思へは親がうらめしい。

それよ、御覽よ、世の中は

若葉の緑、薫る風、

中をふはく羽をのりて

虫けら風情の蝶までが

飛んであるくよ情無い、

われらはいつも詫をまひ、

蚯蚓のむじの生づくり、

萎んだ花に三杯酢、

持ッて母御が歸ッたら

三疋ともには打ちそろひ、

こゝをを出してと願はるか？」

御前も承知か、合點だ。それが宜からう、至極妙。

善はいそげだ、今言はう。

それく、母御も御かへりだ、

御機嫌取ツて願はうぞ。

「どうぞ母さま御ねがひを

叶へてくだされ、御なさけに。

風もかよはぬくら闇よ

目ばかりはちくりして居るが

何れうれしうムいましよ。

押しも押しされぬ身と爲ツて

最早苦勞は無いもれと

言へば母親かぶりをふり、

「それは御前此心得ちがひ、

これ世の風はあらいもの、

時よよッては母さへも

吹き惱されてたぢろぐを、

御前なんぞ

が飛でも無い、どうして凌ぎとほせやう。」

「いえく、それ は 母さま が

いつそ 却ッて 心得 ちがひ、

是でも 羽 は ふたつ あり

ましてや 飛ぶが つとめ の 身。

御覽 そこら の てふく の

蝶の かよわい 身で さへも

あれ あの やう に ひいら ひら

面白さう に 飛んで 行く。」

「いゝえ、それこそ 心得 ちがひ、

こゝは 鳥の巢、世の中は

いたづら者 の 巢、悪魔 の 巢。

吹矢、綱ざし、弓、鐵砲、

落とし、おツちめ、さまとくの

品を つかつて だまかせば、

世馴れぬ 雛 は いつ も みな

是に 掛かつて さて 最期。

あゝ 恐ろし や、恐ろし や、

知らぬ こと とて ひたすら よ

若氣 に はやる も 仕方 無い、

許ゆるの 出でる まで 待まちった が よい、
母はの 言いふ 事こと よく 聞きいて、

心こころ得ひた か」と 説とき せめす。

良りやうやく薬やく 口くちに にかい たとへ、

雛ひなは ろくく 耳みみにも とめせ

母はが ふたゝび 餌えを 取とりに

出でた 留る守も 三さん疋びき 又また 相さう談だん、

何なんの それ程ほど 世よの 中なかが

恐おそろし からう、馬ば鹿からとい。

それく 蝶てつは われく の

鳥とりに 食くひれて 餌え ともなる

弱おい もの だに あの 姿すがた。

無む駄だに 苦く勞らうの 大だい無む用よう。

母はの 居ゐぬ うち 出でて 見みやう。

いやしくも これ 鳥とりの 身みで

風かぜを 恐おそれて 居ゐられう か。

えらいぞ、えらい、大だい賛さん成せい!

兄あに貴き、いづれ も 同どう意いする。

そんなら 是これから おゝ さうぢや。

打ち つれだつて 飛び 出せは、

風 やいらか 花薫る

夏の 雨の ころよき。

はトめて 見れば 野も 山も、

たゞ 珍らしく たもしく、

右よ 左と 飛び まはり、

羽 1 まかせて 行く さき 1

ひらく 行く のの 蝶 二疋

それ と はるか 1 聲 を かけ、

「其處へ 行く のは 蝶々か！」

初の 旅路 1 かう 三人

兄弟 そろつて 出て 来た が、

勝手が 知れぬ で 飛び 1 くい。

御前は もはや 二月 も

前 から 飛んで 慣れて 居よ。

案内 たのむ、その 代り

今日 は 御前 を 食ひ は せぬ。

どう ちや 1 と 追ひ つけは、

蝶 は 見かへり 毒 を さけ、

「是はく御揃ひで
ようこそ 御出掛け あそはした。

まだ 飛び 馴れぬ 若さまの 風も無く、

御案内 から いたし ましよ。 御覧 取つては 最上等。

恥かし ながら わたくしの 妻の阿蝶と申すもの、

きのふ 婚禮 した はかり、

御心 下さる な」と

眷属 鳥の 餌と 爲つた

世の中 くらぬ 雛どりよ

竊に 思案 する よしは

扱は 扱は 扱は 扱は 扱は 扱は 扱は 扱は 扱は 扱は

扱は 扱は 扱は 扱は 扱は 扱は 扱は 扱は 扱は 扱は

扱は 扱は 扱は 扱は 扱は 扱は 扱は 扱は 扱は 扱は

扱は 扱は 扱は 扱は 扱は 扱は 扱は 扱は 扱は 扱は

扱は 扱は 扱は 扱は 扱は 扱は 扱は 扱は 扱は 扱は

扱は 扱は 扱は 扱は 扱は 扱は 扱は 扱は 扱は 扱は

扱は 扱は 扱は 扱は 扱は 扱は 扱は 扱は 扱は 扱は

扱は 扱は 扱は 扱は 扱は 扱は 扱は 扱は 扱は 扱は

扱は 扱は 扱は 扱は 扱は 扱は 扱は 扱は 扱は 扱は

扱は 扱は 扱は 扱は 扱は 扱は 扱は 扱は 扱は 扱は

扱は 扱は 扱は 扱は 扱は 扱は 扱は 扱は 扱は 扱は

扱は 扱は 扱は 扱は 扱は 扱は 扱は 扱は 扱は 扱は

扱は 扱は 扱は 扱は 扱は 扱は 扱は 扱は 扱は 扱は

扱は 扱は 扱は 扱は 扱は 扱は 扱は 扱は 扱は 扱は

扱は 扱は 扱は 扱は 扱は 扱は 扱は 扱は 扱は 扱は

案内 する 氣か と はかり で 蝶々も
一言と 言ひぬ

今は 三正 意氣揚々。

そよ吹く 風に 搏つ 羽の

音 さやく と 心よく、

かう も 楽しい 世の中を

へだてる 親の 氣が 知れぬ、

思へば うまく 抜け 出た と

うかれく て 西ひがら。

はトめて それと 見た 天地、

水色絹で 張りつめた さて 廣いもの、えらいもの。

天の 天井、流れ 川、

峯よ 朝日の 紅のこる

遠山の 端の 染めいろ は

羽の 柄に も 好ぢや 無いか。

行く 道々で 逢ふ 鳥の

仲間 の 數は 何百羽。

鴉の 眞黒、鷺の 白。

鴉は 里の 掃除方、

腐れ肴をかたづけける。

鷺は浦曲の漁夫どの

嘴魚銛で魚を突く。

經よみどりの聲自慢、

燕の曲飛び、鶉の水藝。

見るに見飽かぬれもろろさ。

虻に出あへはとつかまへ、

花を見付けりや露を吸ひ、

あてども無しにさまよへは、

さすがに羽もつかれ来て、

呼吸も忙しくなる體と

それと見て取るてふくは

いちめる場合ひ今こそと

羽はさきいあがらふりかへり、

「若さまいかゞ、御つかれか？」

まだ是しきの道のりに

疲れるやうな弱むいで

よも若様はムるまいと

言ひれて見れば流石にも

疲れまゝと一言へもせせ、

三正 とも に 異口同音

「いや〜 何で つかれ やう。

羽 は びん〜 まだ 達者。

もつと 今より 面白い 案内 して くれ」と

顔を しかめて こそへれば、 冷笑ひ、

「そんなら 是れ から 中空 で 踊り を やらう ぢや ムらぬか？

蝶 は にや〜

自慢 ぢや 無い が われ〜の

踊り は 世に も 罕な もの。

蝴蝶 の 舞ひ と 名を つけて 人間さへ も 真似 まする。

御いや で 無くは 教へ ましよ。」

「それ は 何より 有りがさし。

かう して 旅に 出さ ばかり、

土産 無し では 歸られぬ。

その 舞ひ をしへて 貰ひ ましよ」と

疲れ め 厭ハせ せき しては、

して やつさり と てふ〜 は

勿體 ならなく 改まり、

「今 言ふ とほりの 舞ひ あれば、

迂濶 な 修業 で 出来 ませぬ。

中空 さかく 飛び あがり、

命 の 限り 骨 かぎり、

わきら ふさりの する とほり

一心 こめて 爲ないでは

とても 成就 は ねほつかぬ。」

「それは 承知 さ、合點 さ。」

「その 外 別に 心得は

修業 を しとけ とほす 事、

半分 稽古 にはトめて

中途 で 否 と 言ふ 時は

飛んだ 崇り が 有り ます ぞ。」

「それも 承知 さ、合點 さ。」

「たとひ つかれて 死ぬ まで も

中途 で やめぬ 御所存か？」

「もとより 以て 異存 無い。」

そんなら 教へ 申さう と

蝶 は 眞先 ひらく と

虚空に舞ひあがる。

たくれはせと後を逐ひ

つかれさ羽を はけまして ゆめうつゝ、

何を言ふても 雛の身の つゞいとが、

知らぬかならさ、なか〜 風に味

心はやッて 羽利かき、

下界を見れば 家低く、

下では 左程と見らぬ 人 の 影。

身体は 正に 綿のやう、 慣れた身の

軽く 飛びく 気合ひよく、

見かへり かがら 踊り 出し、

聲 聞 く 雛 の 身 の つらさ。 修業 々々 と 呼び 立てる

舞へは 舞ふ ほど 右ひだり、 氣を 奨まして 言ふ が 儘

上下、 横縦、 前うしろ、

火水 に かれ と 揉み 抜かれ、

あはや 中途 で 止め さうな 姿 に 蝶 は あざわらひ、

御つかれ ですか と 冷かす に、

無念 々々 と 口 つゞけ、

今更 からむ 意地の 綱、

終に は それ も 堪へ がたく、

命 かぎり に 根 かぎり、

前後 失ひ、 力 盡き、

三正 とも に 目 くるく、

子供 が 認め 駈け 寄つて、

さつ と 大地 に 遠近 の

無残 や すぐ に 手づかまへ！

人を のろはゞ 穴 二つ、

(三七)

學 文 年 少

是 これ も いつしか 蝶 てつ よ も あたる 同 どう ト 罰 ばち、

地上 ちじやう に 落ちて 雜 ひそ に つゞいて ふはく と

爲 な つて いづれ も 御陀佛 たたらぶつ 々々々々。

君子 くんし の 腹 はら

人間 にんげん が 此世 このよ の 中 なか に 生 なま れて 扱 ま 心の 寛 ひろ い、 えらい 人 ひと に 爲 な るの が 好 い いり、 それとも 胸 むね の 狭 せま い、 つまらぬ 者 もの に 爲 な るの が 好 い いかと 聞 き く時 とき に 誰 だれ でも 心 こころ の 寛 ひろ い、 えらい 人 ひと に 爲 な りたいと 曰 い ふでしやう。 仇 あだ を 恩 おん でかへす 杯 さき は 心 こころ の 寛 ひろ い 人 ひと の 常 つね で、 受 う けた 惠 めぐみ を 仇 あだ で 返 かへ すのは 極 ごく 々の 悪 あく 人 にん の 所 しよ 業 げふ で す。

むかへ 英國 いんぐわい にどこオるすと 曰 い ふ 貴 き 人 にん が 有 あ りまらした。 日本 にっぽん で 言 い へば 男 おとこ 爵 しやく ぐらゐるな 家 いへ 柄 がら で 一 ひと つの 城 しろ の 主 ぬし として 聞 き えて 居 ゐ た 人 ひと でした。 處 ところ が 此 この どこオるすは のるま 家 いへ と

いふ家柄の人で、此時分英國も此のるまん家に対し別に時めいて居たさくすん家といふのが有りました。比へて見れば日本の平家と源氏とのやうなもの、それで雙方の家で互に權威を争ひ、殆んど絶えを睨めツくらで張り合つて居ました。

さて此さくすん家の一人にあゝさアといふ若武者が有りました。血氣に任せ、何でも世界は自分の自由だと思ふやうな意氣込みで、前のどこオるすの評判の好いのが妬ましくてならぬ、どこオるすが居るので一つはのるまん家の勢も好いといふ處からあゝさアは仇敵のやうに



いふ家、御の人で、此時分英國より此の島に家に対し、
は、御のいて居たさくすん家といふのが有る事だ。比
べて見れば日本の平家と源氏とのやうなもので、
御の家と互に權威を争ひ、殆んど絶えを認めず、
り合つて居ました。

さて此さくすん家の一人にあゝさアといふ若武者が有
りました。血氣に任せ、何でも世界は自分の自由だ
と思ふやうな意氣込みで、前はどこかおるすの評判の好い
が妬ましくてならぬ、どこかおるすが居るので一つはの
まん家の勢も好いといふ處からあゝさアは仇敵のやうに





之を憎み、その憎み憎んだ果は終にどこオるすを殺して
 仕舞ふ氣に爲りました。いよゝゝ夫と決心し、ある夜
 夫婦差し向ひの時ひそかに其趣きをあゝさアは自分の妻
 に話して聞かせると、妻は大に驚きました。此妻とい
 ふのは中々賢明な女で、輕はづみな夫の所業、それは苟
 しくも武士とも曰はれる者の爲べき事で無いと頻りに夫
 を諫めました。殊には聞けは夫はどこオるすを暗撃に
 するとの嘶し、さりとは卑怯の至り、末代までの名の汚
 れ、よゝや殺したとて牙えぬものを、どうぞ思ひ止まッ
 てくれと、果は涙に爲つて夫の志しを翻させやうとは爲

ましたが、更に良人は聞き入れず、いよく翌日はどこ
オるすが餘所へ出るにつき其路の森の中で待ち受けて見
事えらい目に逢わせてやらうと固く心を決めました。
森の茂處に身を潜め、張り切つて緩むを知らぬ弓に矢
つがへ、待ち設けて居ると知らぬが佛、はたしてどこオ
るすは只一騎同伴をも連れず山風に若駒の鬣浪をうたせ
ながら差し掛かる森の中、何氣なく不圖目を放ては、風
の戦ぎと思ひの外、草叢陰に伏した曲者、すはと心付い
て屹とにらむ、途端、兵弗と鳴りわたつて箭は目の前に
飛んで來ました。

が、氣も付いた上のこと、心得たとはかり身をひねれ
は箭は徒らに虚空を掠めて後ろの方へと飛び去る其時、
どこオるすも赫と爲り、何ものと叫んだま、茂處を目掛
けて飛び掛る、扱の仕損トたかと氣を奪はれて今もあ、
さアも前後狼狽、二の箭をつがふ隙も無く、忽ち茂處を
飛び出して一目不散に逃げ出す姿、見れば見覚えの有る
人間、「これ、あ、さア！」と呼び掛けてどこオるす
は烈しく逐ふ、生死二つの危急の場合、さそがにあ、さ
アも一生懸命右に折れ左に曲り、とうとう影をかくしま
した。

もはやどこオに見られたと思へはやがて捕へられ
るは決つた事、それ考へれば恐ろしく今は森の中に匿れ
た限りあゝさアは出る事も出来なく爲りました。果し
て實に推察とほりどこオるすも其儘歸つて其趣きを臣下
に傳へ、時を移さば人を出して、扱當の相手のあゝさア
を探させるりと思ひの外、やがてあゝさアの館へやつて
ふれだといふ一人の子を人質に取つて歸らせました。
言ふもたろか、あゝさアの妻の嘆きとまた悲しみ、身
も世もあらぬ思ひでした。女の諫めと蔑んで一向に
聞き入れぬ、その果は此始末。良人は亡命、子は取ら

れる、涙に兩眼泣き脹らして、よりく探りを入れて聞
けは、良人は其後森の中に潜まりうへつて匿れて居る由
さて妻の身として其儘よれめくとして居られもせぬ、
烈女の一心その支度さへ甲斐々々しく、森と言ふ斗り雲
を目的、たゞ一念とはれと計り森へ辿り着いて尋ね
る精神、神明も哀れと見てか、やうやくにらして尋ね當て
見れば見るまゝ、涙も出る良人の姿。この四五日うづく
まつた儘物も食べぬ、泥に塗れた顔どころまだらの髯さ
へ生へて顴首のみが高く爲つと体、扱も心がらとは言ひ
かがら浅まらぬ姿に爲られたものと駭け寄つて泣き出せ

は恩愛の枷に責められてあゝさアも同トく涙に暮れまじ

た 妻は夫に向ひ、どこオるすに子を取られた事を告げ知

らせ、此儘にして置く時は何も知らぬ可愛い子がされ程

苦難を見るであらうか、人の親の心としてどうして黙つ

て居られるもの、唯この上は貴君さまの御心一つ、前非

を早く後悔し、名唱ツて出て罪を懺悔したことなす慈悲

深いと噂の有るところオるす何で手荒いことを爲まじやう

これより外に道も無い、そこを何とぞ合點して何うぞ心

を改めてと一生懸命に搔き口説く其心根のいちぢうさ、

流石あゝさアも我が折れて、妻の言ふ言葉のふじとひ

とくと肝に答へまじた。よじや兇暴でも、残忍でも

さて人並の心は有り、妻子の可愛い事は知る、現在見す

見す可愛い子が敵の手に取られたのも元を正せは自分か

ら、自分ゆゑに起つた事と思へた、ほとくと身も世も無

くなりまじた。

承知の趣きを答へて妻をかへし、いざと森を立ち出た

時の心持ちは一生忘れぬ苦しみでじた。頼む處は只

々どこオるすの慈悲はかり、坊主が憎ければ袈裟まで憎

く、嗚人質を手荒しくして居るであらう、まだくと三つ

か四つの小供、寐耳に水と驚かされ、恐ろしい敵地へ荷
ひ去られ、敵の片われと残酷に取り扱はれて嘸泣き悲し
んで居るであらう、嘸父母を戀ひしがつて居るであらう、
嘸寒い思ひをして居るであらう、嘸見るからが恐ろしい
暗黒を石の牢の中へ入れられて日の目も見ずに居るであ
らうと種々さままゝに考へれば、最早親の身の自分の方
が死にたくも爲つた程でいた。念ぶる所は天地神明、
懺悔後悔胸を衝いて、何のく可愛い子の究命が救へる
ものならばよしや自分ほどのやうな苦しい目に逢はうが
厭はぬと迄思ひ入つと、あゝく親の慈悲といふ物は。

行き行いてどこオるその館の門前より到着し、番兵に自
分の名を告げて何とぞ御主君どこオるを様へ御目に掛り
といと述べました。述べると否や番兵は以ての外驚き
ました。見れば相手は而も前日主君を殺害しやうとし
たあゝさア、人質まで取られとあゝさア、その敵、その
油断の爲らぬあゝさアが阿容々々として只一人しかも主
君に逢ひといとは！己れ曲者と番兵は二三人むらむ
らと寄り集まり、立ちどころあゝさアを生捕よして仕
舞ひまゝと。

が、此方は素より覺悟の事、更に些とも悪びれず、向

ふの儘に爲つて居まらう。中でもどこオるすの家臣が大心配、何れも稀有の事に思ひまらう。陰險さだまらぬ古狸、何の謀計が有つて御面會を願ひに來さか分からぬ物を、輕々しく御對面に爲るのを恐れながら危いことゝ一同に口を揃へ、主君を思へばこそ張り肱して、或も黙つて居れば對面も爲かねぬ大度量のどこオるすに諫言を納れまらう。が、どこオるすも聞き入れず、なる程皆々の心配も一應尤もの事でも有るが、あゝさアとて鬼でも無し蛇でも無し、ことに人質を取られて居る上でどう亂暴が出来やうか、其方たちも知るとほり、人質に

して連れては來さぬものゝ、極めて鄭重に取り扱ひ、些くも苦痛の無いやうにして其子供を字んで居る此方の有り様を今丁度幸ひあゝさアに見せよならよと悪心を以て近寄つて來たし、亂暴は出来るもので無い、この邊は苦勞も及ばぬと飽く迄宏い主君の胸一同も感入り、やがて前後を警衛していよくあゝさアに對面する事と爲りまらう。對面の間に入つて二人顔を合せるや否やあゝさアは慚愧の念一度にもよほして上を見ることも爲らぬ、男泣きに泣き沈んで只叩頭して詫びまらう。が、どこオる

すれ別段に物々しくも思たぬ様子、御志しを分かりまゝ
とから最う長く同ト事を仰やらないでも宜し、と差止
めて長くも言ひせせ、それうら人質をどうぞ返してくれ
と冀ふあゝさアの言葉は應ト、とおオるすの身を起し、
如何にも返して上げまじやう、御案内しますから久しぶ
りで可愛い子の顔を御覽なさいと自身先へ立つて奥殿へ
誘ひまじと。

思ふに優して物婉しいどこオるすの挨拶に此方は穴へ
も入りさいやう、人心地も無いばかり長廊下をあちこち
へ導かれ、只有る一間へ誘ひ入れられて一目見て吃驚し

まじと。可愛い吾子は、何とること、誰が見てもどこ
オるす其人の實子と思はれる計りの體さうく、麗はしい
着物にくるまつて殿中の侍女どもに柔かく搔き抱りれ、
罪も無くすやくと眠つて居て、そして又其傍を見れば
綾にじき色々の珍らしい手遊物迄が何不足無く取り揃へ
てあるといふ重ねくの意外の始末にこらへくと溜め
涙も終には自ら制する由なく、あゝさアはあつと言つと
斗り床の上に平伏して仕舞ひました。

すると其手を取つてどこオるすは相手を起き上がらせ、
「私には、か、決してく罪の無い子供を敵とは爲ませ

んよ。成る程貴君も一時の血氣から弓を私に彎いとのでしやうが、何ごとにも天道の照覽は有り、失禮ながら其時あなたの方は不道理、それ故遂に箭も立さざこの仕儀とは爲りました。が、それも何も早過ぎた事、今更くどく言ふのも無駄、私に於ては毛頭それを遺恨に思ふの何のと言ふ事はムいませぬ、怨みも何も一切まるで忘れて居ます。それ故今斯うさしく御目も掛かッて事さへ既に判かつて仕舞へは此上別に言ふ事も無し、御子はさうかに御返し申しますからどうぞ其御含みに願ひます。」

言ふまでも無くあゝさアは此寛仁大度の言葉を聞くにつけ耻ぢてく顔をも擡げ得ぬはかりに爲り、いよく男泣きに泣き沈んで只管くどくと罪を詫びました。が、どこオるすの大度量は是ばかりで無く、凡々の人おらは逆もく出来ぬといふ事、即ち其あゝさアの子を終は自分も貰ひ受け、相續の人とした事でした。言ひ、仇敵の片われ、それを貰ひ受け、そして聊かも心に掛けぬ胸の宏さには誰も彼も敵も味方も國中れいなべて感心し、あゝに於て其前まで兩家相憎んで居る念も全く無くあり、世は平和にをさまりました。

う た へ 鳥どり !

う た へ 鳥どり ! 愛あい ぐ ら き 鳥どり !

快こころよ き う た を 聞き か せ よ。

す や く と ね ふ り に つ か ん、

れ の づ か ら 嘆なげ き も 去さ ら ん。

う さ へ 鳥どり ! う た へ や、 う さ へ !

鳥どり の 歌うた わ れ は 喜よろこ ぶ。

い さ う さ へ、 今日けふ も 終ひな 日びと、

ち よ く と い と こ ゝ ろ よ く。

うさへ
鳥

その
聲
は
天
の
聲
なり。

うさへ
鳥

愛らしき
鳥

こゝろよき
歌
を
聞かせ
よ!

花
薫り、
風

あさかく、

若みどり
草葉
は
うごく。

うさへ
鳥

その
歌
は
天
の
ま
ま
の、

うさへ
鳥

愛らしき
鳥

こゝろよき
歌
を
聞かせ
よ。

その
歌
は

天
の
ま
ま
の、

東市本郷三町一軒 十五日



神 戸 一

蝶のをしへ

さながら瑠璃とも思はれる程の若葉の緑、紫の毛氈を
引きわたしたかと思える澤の菖蒲、今からいよく夏をか
る其序開きとも言ふやうは景色のうつくしさに浮れて、
一人の小さな子供が土曜日の午後の閑暇なのを幸ひ近處
の野原を散歩しました。

さほど暑くも無く、素より又寒くも無く、単衣に襯衣
一つで丁度凌ぎいゝ何とも言はれぬ結構な日和に心はゆ
さくと爲つて面白さは何とも言へぬ、それから學校で
覚えと唱歌を大聲立て、謠ひながら草などを摘んで居る

目さきを忽ち飛んで過ぎるのは大きな一疋の蝶でと。其羽の美しくい事と言つたら實にく口では言へぬ位でと。而も大きき差しわたる四寸ぐらゐる有る大きな蝶で、羽は黒地と金色の奇麗な星が有り、羽の縁には丸で小供の阿母さんが縫つた事の有る赤坊の御巾着の縁見たやうな赤い筋がくつきりと付いて居ました。見れば扱捕りたく爲り、子供はそれかゝ一心をそれへ籠め、何處迄も追ひ掛けく、蝶が草の葉にとまるのを見ては抜き足差し足近寄つていくたびか取りそこなひ、それでも一生懸命にしたら甲斐あつて終に辛くして押へました。

押へてやがて懐中へ押し込み、もはや四邊の景色も何も目には入らぬ、一目不散になつて家へ歸つて、さて大變に美しくい蝶々を捕つて來ましたと母親に告げました。そんな美しくい蝶々か出して御見せと言はれて子供の心を宛然勇士が戰場からい、敵の首を持つて歸つた時と同トく、是見してくれと言ひぬ斗り懐中をかい探つて取り出して見て駭く、何と思ひも付かぬ、其蝶はまるで別物のやうな爲りまゝと。つよく手で掴んださめに折角の美しくかつた羽の箔も落ちて見る影も無く、子供も今更仰天一、さすがに又残念でも有り、あらと言つた儘駭き呆

れて、失望の氣色があり、顔に現はれました。が、母は深くも駭かぬ體、「御前かぜそんなに吃驚するの？」
 「だつて阿母さん酷いもの。」 「そこは御前が些とぬかつたのだよ。」 「あたしが？」 「美しくもなく爲つたのは其蝶々のわるいので無いの、又御前のわるいのも無いの、御前の取り扱ひが唯悪かつたの。かうしてこんな辱弱い虫だもの、それ相應に柔かく取り扱ひなければ矢張りよくは保ちません。物といふものは何でも取り扱ひ次第だよ。」

坑 夫

自業自得 と あきらめて

あきらめられぬ 身の 因果、

人 と いふ さへ は づ り し き、

わが 身 の 上 ぞ あぢき あき。

われ も ひかへ は 藏 附 き の

家 を 踏 ま へ ら ぁ る ト よ て、

妻 も 子 も 有 り、 め と つ か ひ

三 人 四 人 は 養 へ り。

親おやの 残のこせし いへくらを

くるしき 事ことは そのまゝ、受うけて 世よの 中なかの

はつめ 知しらぬ、 迷まよふ 道みちをぢ は

はかすぢ

邪じよ悪あくの 山やま路ぢ 谷たに ふかく、

かるた遊あそびの 憂うれさ晴はらじ、

慣なれて ハ 黄こがね金 掛かけ 合あひて

夜よの 更よくる を も 忘わすれ つゝ。

こゝろ つかれて 飲のむ 酒さけの

魔ま力りき は 身み体た 綿わた と あり、

身みも 世よも 魔ま力りき は 身み体た 綿わた と あり、

果はては 財さい囊ぶくろ さかしまに

その 家いへ藏くら も 人ひとの 物もの、

集あつまり きたる 債かひ取とり を

かへす 術まづ さへ 盡つき はて つ、

踏ふみ すべらせし 足あし とも に

身みの 陥たぢいりと 貧びんの 穴あな、

天てんの 光ひかりりも 見みえ わかぜ。

ひとくち 切きれて 堰せき あへぬ

堤つみの 水みづに あらねども、

くづれ そめたる 身みの いかで

たやすく もとに かへるべき。

そら 恐おそろと と知り つゝも、

邪じや念ねん心こころに 巢そを かまへ、

われ から くゞる 天てんの 網あみ、

闇やみを たよりの 鏃やどり切きり。

隠かくす 間まも 無なく あらわれて、

腰こし繩なは付つきの 身みと なれば、

悲かなし！ この 世よに 住まみ ながら

今いまも この 世よの 人ひとからせ。

影かげいと 寒さむき 夜よ半はんの 月つき、

結ぶ むかし の 夢 はかり
囹圄 の 霜 の 曉方に

榮華 の 後 を 尋ね つゝ。

世に くるしみ は 多かれど、

自由 の からぬ 身の上 に

ませし くるしみ 有るべきか、

われ も 自由 を 失へり。

花の たより も 餘所に 聞き、

格子 一重 が 世を へだつ

關所の とびら、 くらがね の

垣 と も 見えて 哀あり。

たゞ ひたすら に つゝしみて、

罪 ほろぼして 世の中 に

いで、 妻子 を たづぬれば、

ゆくゑ は 更よ くら雲 の

さだめ 無き 世の あぢき なさ。

それ も 誰 ゆゑ、わが 身 ゆゑ、

これ も 何 ゆゑ、りるた 故

思ひ いだせは 身の 毛立つ。

出家の 身と も ならんか と

一時 は 胸も 定めら が、

さすが に 心 猶 よわく、

髪を 煩惱 もろとも に

切る 力 きて 無き まゝに

人の 言ふ まゝ、すゝめられ

いはし 浮き世 を このはんと

それ より こゝに 穴 住ひ。

身 は 金ほり と かり いてゝ、

見れば、たもへは 鈍まらや、

固圀 せまひ に 猶 劣る

これぞ 此世の 地獄 なる。

覺めてぞ夢は知りぬべき

うとと見と世の中々に

戀ひとかりとは思ひきや

今人並の身に非ぞ

世のうるはとき朝日かけ

それゆこゝには拜まれぞ

世の愛らとき鳥の聲

それゆこゝは音づれを





源下

覺めてぞ夢は知るぬべき

うしと見し世の中々に

驚ひしかりとほ思ひさま、

今人並の身に非ぞ。

世のうるはしき朝日かけ、

それもこゝには拜まれぞ、

世の愛らしき鳥の聲、

それもこゝには音づれぞ。

むかしの罪を責め顔に

色物凄き星かけに

道てらさして朝まだき

穴に入りつゝ業は就く。

穴は地中は幾十里、

うねくうねる七曲の

玉ならなくよ

闇ふかく、奈落の果は通ふめり。



毒氣 あたり 満ちくして、

滴る 水のぬめり には

衣 かつぐ べき 術 も 無し、

いづれ も すべて まる裸体。

仲間 と いふ の あらくれの

人形 したる 獣 なり。

はかなき 事 を あらそひて

昨日 も 今日 も 血 を 流す。

人 を 殺す は 草 の 葉 の

虫 を 捕る より たやすくて、

死ぬる が 不運、 なきがらは

路 に 埋めて 人 知らぬ。

折りに は 天地 震動し、

穴 此 岩石 くづれ 来て、

下に いかれて 人 知らぬ

哀れ 最期 と なる も あり。

鐵くさき

水

すくひとり、

それをせめての保命酒

結びの飯

其の一日の命なり。

休めは 搥たれ たくかるゝ

それ 苦しさに 働かけを、

身にも 湧くなる 油汗、

痰に 交へて 血をも 吐く。

やがて 終りを つけ わたる

下知は かげらき 夏の 日よ

雨待ち 得たる 心地よて

うれしさ 口に 述べ 盡きぞ。

坑を いづれは 曉方の

空に かはらぬ 星あかり。

闇より 闇と たり つゝ

日影を あふぐ よこも 無し。

囿ひとや

と いへど 日は 照てらん、

囿ひとや

と いへど 鳥とも 鳴なく。

口くち

よ 言いふ だに 忍しのび 得いぬ

坑あなの 哀あはれを 思おもへ かし。

鼯むら鼠

ならぬ に 穴あなを 掘ほり、

いかに 命いのちの つゞく べき。

坑あな

を 日ひ々々 堀ほる 鉄てつは

日ひ々々 いのち 削ける あり。

娑婆しあは

は 人じん生せい 五ご十じゅう年ねん、

こゝ は 三み十じゅうを かぎり に て、

死しぬ

こそ せめて うれし けれ、

生いき の ころ こそ 怨うらみ なれ。

むかし は 命いのちを とみし 身み、

今いま は 命いのちぞ ほだし なる。

の ぞみ 絶たえて は 最さい期き の み

たゞ の ころ べき 望のぞみ なり。

雨のひぐらし終

明治廿四年七月十三日印刷
明治廿四年七月十四日出版

價 定

一册	金拾二錢	郵稅一册四錢
六册	前金六拾七錢	御注文前金郵券代用一割増
十二册	前金一圓廿五錢	每月一回發兌
廿四册	前金二圓四拾錢	

編輯者兼

大橋新太郎

日本橋區本石町三丁目十六番地

印刷者

杉原辨治郎



發行所

博文館

東京日本橋區本石町三丁目十六番地

少年文學

每月一回發兌
和裝密畫入美本

正價一冊金拾貳錢六冊前金六十七錢十二冊
前金一圓廿五錢郵稅一冊四錢ツ、
御注文ハ一般前金ヲ要ス

- | | | | | | | | | | |
|----------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|
| 第九編 | 第九編 | 第八編 | 第七編 | 第六編 | 第五編 | 第四編 | 第三編 | 第二編 | 第一編 |
| 姉親 | 親 | 二宮 | 寶 | 雨 | 維 | 今 | 二人 | よ | よ |
| と | の | の | の | の | の | の | の | の | の |
| 弟 | 恩 | 翁 | 山 | し | 傑 | 慶 | 助 | 丸 | 丸 |
| 嵯峨のやおむろ著 | 宮崎三味著 | 幸田露伴著 | 川上眉山著 | 山田美妙著 | 北村紫山著 | 江見水蔭著 | 尾崎紅葉著 | 巖谷漣著 | 武内桂舟畫 |
| | 小林永興畫 | 小林永興畫 | 武内桂舟畫 | 富岡永洗畫 | 石版畫 | 武内桂舟畫 | 武内桂舟畫 | 武内桂舟畫 | 武内桂舟畫 |

第十編ハ石橋忍月氏トス

前帝國文科大學教授内藤耻叟先生撰

少年必讀 日本文庫

全部拾二卷
紙數五千頁
一冊紙數四百二十頁
每月一回發兌記事讀切
正價一冊金二十五錢
六冊前金

壹圓二十五錢 全部十二冊前金二圓五十錢 郵稅一冊六錢

- 第壹編目次(刊) 正學 指掌尾藤孝峯 閑散餘錄南川士長 熊澤先生事跡考清水臥遊
- 第二編目次(七月十日發) 常山樓筆錄湯淺常山 東潜夫論帆足萬里 年成錄中井履軒 戊戌夢物語附 夢々物語 高野長英 慎機
- 論附 缺舌或問 渡邊 華山 幼學課業次第佐藤一齋 實用館讀例平山子龍 文會雜記湯淺常山 夜母物
- 第三編目次 詩文國字牘物 祖徠 經世秘策 千代のためし
- 第四編目次 仁義畧說朝川善庵 形影夜話杉田篁齋 授業編江村北海 齋庭之穗 護園談餘物 祖徠 新廬面命
- 第五編目次 幼學問答伊勢貞丈 問答早學問大江玄圃 齋庭之穗 護園談餘物 祖徠 新廬面命
- 第六編目次 聲文私言金世 雲室筆隨雲室上人 燃犀錄服部天遊 本與錄岡白駒 新廬面命

帝國文科大學教授正七位内藤耻叟君 校訂標註
慶應義塾大學部講師 小宮山綏介君

近古温知叢書

全部拾二卷
紙數五千頁
一册紙數四百二十頁
洋裝美本堅牢仕立
每編記事讀切完結

明治二十四年一月より十二月迄毎月一册發兌一ヶ年間に全部完成す
定價 ●一册廿五錢 ●六册前金一圓三十五錢 ●十二册前金二圓五十錢 ●郵税一册六錢

- 奴 九 老 の 樂 市川 柏庭 異本洞房語園 莊司 勝富
- 東海道名所記 編 幕朝故事談 蜀山 太田
- 白石小品 編 俗耳鼓吹 蜀山 太田
- 後は昔物語 編 斯文源流 河口 靜齋
- 松屋叢話 編 近代世事談 菊岡 沾涼
- 妙々奇談 編 野叟獨語 杉田 鷗齋
- 閑なるあまり 編 寛天見聞記
- 八水隨筆 柳亭 種彦
- 用捨箱 内安 忠明
- 戲場新話 内安 忠明
- 淨瑠璃譜
- 物之本江戸作者部類 相場 長昭
- 遊女考 相場 長昭
- 瀨田問答 太田 蜀山
- 洞房語園考異 瀨名 貞雄
- 浪花の風 久須美 祐鶴
- 望海每談 山東 京傳
- 近世奇跡考 京傳
- 塵塚談 小川 顯道

- 平賀鳩溪實記 山岡 俊明
- 紫のゆかり 編 增補浮世繪類考 秋田 邦教
- 貨幣秘録 編 三目次 永落書 小山田 與清
- 南留別志の辨 編 赤目次 相撲傳 服部 天遊
- 吉原十二時 編 赤目次 相撲傳 服部 天遊
- 神道獨語 編 赤目次 相撲傳 服部 天遊
- 隅田川考 編 赤目次 相撲傳 服部 天遊
- 賤のをだ卷 編 赤目次 相撲傳 服部 天遊
- 道成寺考 編 赤目次 相撲傳 服部 天遊
- 窓の須佐美 編 赤目次 相撲傳 服部 天遊
- 奈良柴 編 赤目次 相撲傳 服部 天遊
- 八木のはなし 編 赤目次 相撲傳 服部 天遊
- 本朝細馬集 編 赤目次 相撲傳 服部 天遊
- 著作堂一夕話 編 赤目次 相撲傳 服部 天遊
- 菅蠶の像 編 赤目次 相撲傳 服部 天遊
- 藻辨 編 赤目次 相撲傳 服部 天遊
- 浪花の風 久須美 祐鶴
- 望海每談 山東 京傳
- 近世奇跡考 京傳
- 塵塚談 小川 顯道

東洋文藝叢書

全部廿四冊 紙八千頁 以上
 壹冊紙數三百五十頁 ● 每月一冊發兌每編讀切
 正價 一冊金二拾錢 ● 六冊前金壹圓拾錢 ●
 十二冊前金二圓 ● 全部二十四冊前金
 三圓五拾錢 ● 郵便稅一冊二錢五厘 ヲ

東洋文藝全書 自第一編至第廿四編 總科目

第一編	千代田歌集	第一編	佐々木弘綱撰
第二編	和漢名家詩集	全一冊	松井柏軒撰
第三編	日本本文範	上卷	佐々木信綱撰
第四編	日本本文範	下卷	佐々木信綱撰
第五編	和漢名家文粹	上卷	北村紫山撰
第六編	和漢名家文粹	下卷	松井柏軒撰
第七編	古今名家戲文集	上卷	三木愛花仙史撰
第八編	古今狂詩大全	全一冊	三木愛花仙史撰
第九編	新選歌曲集	上卷	岸上質軒撰

第拾編	千代田歌集	第二編	佐々木弘綱撰
第拾壹編	新選歌曲集	第二編	岸上質軒撰
第拾二編	古今名家戲文集	下卷	岸上質軒撰
第拾三編	明治新撰俳諧一萬集	第一編	夜雪庵金羅撰
第拾四編	日本名家詩選	全一冊	佐藤六石撰
第拾五編	古今狂歌狂句集	全一冊	岸上質軒撰
自第拾六編至第拾八編	江戸時代小説十大家集	上中下三卷ニテ	全部完成ス
第拾九編	古今都々逸大全	全一冊	全部完成ス
自第拾二編至第拾三編	義太夫大全文集	上中下三卷ニテ	全部完成ス
第廿三編	千代田歌集	第三編	全部完成ス
第廿四編	俳諧一萬集	第二編	全部完成ス
●古今狂歌狂句集			

七月二十日出版

水哉 坪谷善四郎君著

七月二十日出版

着金即日送本

八

閨秀日本女禮式

全壹册別帙入

紙數六百頁以上

密書百餘個

正金五十拾錢

郵稅拾錢

一名 婦人一代重寶鑑

本書目次

總論

人間に禮節の大切なること

婚姻

日本の婚姻禮式○婚姻の大意○婚姻前の心得附嫁入前に訓

ゆべきことから○婚姻の儀式○婚姻の儀式濟みて後の心得○婚姻儀式のかざりもの心得○西洋の婚姻禮式○婚姻前の心得○婚姻後の心得○支那の婚姻禮式○婚姻前の心得○婚姻の儀式

妊娠中の心得附妊娠中の養生法○出産の心得○出産後の心得○子を育つる心得附見守りへの申渡

夫に事へる心得○家族に對する心得○舅姑に對する心得並姑たるの心得○夫の兄弟姉妹に對する心得○繼母と繼子との心得○家族及親族の關係のと附忌服の

出産

教育

奉仕

と○親族へ對する心得

交際

起居動作の心得○給仕の心得○日本料理饗應の禮式○主客訪問の心得○響應の禮式○食事の心得○西洋料理

諸藝

詞づかひの心得○作文のまはり○手習のと○文に用ゆべきとばの心得○文の書き様附作例○色紙短冊書き方並假名遣の心得○和歌の心得○茶道の嗜

み○茶の道具並に灰のと○風爐先手前のと○風爐點茶平手前のと○爐點茶平手前のと○濃茶會のと○炭手前のと○四疊半濃茶の節の心得○插花の心得○あらゆる挿花の心得○種々ある花のいけかた○香道の嗜み○香のきゝ様○十炷香のこと○香道具のと○香の製

衣服裁縫洗濯染め様の心得○地合を撰むと○衣服たちぬひのと○衣服洗濯のと○染物の心得○飲食料理獻立の心得○客式の料理心得○客式容まかち料理○常式料理獻立○一般料理の心得○勝手道具の取扱心得○住居の心得

經濟

奉公人を使ふ心得○病人あつかひの心得○進物贈答の心得○金錢出納並貯蓄のと○儉約

のと○貯蓄のこと○貯蓄のしかた

金及び保險のしかた

心得草、女孝經、介婦のいましめ、以上

鼈頭

女今川。女子訓。女小學。女大學。愚蒙いさめ草。婦人六徳和解。女五常訓。米國婦人心得草、やまと言語

九